

【 表現内容 B：表現材料】

段ボールのウンチクを語る

段ボールは紳士のファッションから始まった！



工作や造形遊びにもよく使われる段ボール。本来、ものを運ぶ梱包材として、素材や形状の開発には今も留めを知らない。

段ボールは、1856年にイギリスのエドワード・チャールズ・ヒーレイとエドワード・エリス・アレンの二人が、紳士用のシルクハット帽の内側に、波型に折ったボール紙を汗取りとして入れたことが始まりである。

この波型のボール紙を「フルート」と言うが、朝廷の侍者が着た衣装の首周りにつけているヒダ襟に似ていることから名付けられた。日本に鉄砲を伝えた南蛮人の服装で誰もが思い出す襟の波形が段ボールの原形を物語っている。

1875年、アメリカで火薬やランプをくるむ緩衝材として使われ始めたが、フルートだけでは段が伸びてしまうので、「ライナー」と呼ばれる補強用の平紙を貼りつけた。これが片面段ボールの登場である。その後、木箱に取って代わる輸送容器として折り畳み式が考案され、1954年、アメリカで初めて両面にライナーを接着した3層段ボールが誕生する。日本では1909年に井上貞治氏が電球保護用として初めて国産化に成功した。

木板に代わる工作材料としても「安い・軽い・強い」という特性の利用価値は大きく、特にライナーの厚い段ボール2枚を波が直角交する方向に貼りつけると相当強い板材となる。プラスチック用などの両面テープで手早く接着することができ、電動糸のこぎりの切断にも耐える。大小のフルートを二重にした複両面段ボールを上手に活用すれば、さらに強固で多用途な工作材料となるだろう。

木箱1個の資源で8個の段ボールがつかれると言われるほど、環境保護の観点からもその使用価値は高い。紳士の小さな身だしなみ、ファッションの心意気が創意工夫の大切さを今に伝えている。

たちかわやすし
(立川泰史：東京学芸大学附属小金井小学校教諭)